

「戦争中の開成の思い出」

昭和23・24年卒業文集「ペンと剣の旗の下」より

編集 平石裕一

前置き

私が高校を卒業した 1949年から30年ほどたった頃、中学時代からの親友田山に相談の上、中高校生時代の同級生に次のような呼びかけをした。「お互い50台の中ごろに差し掛かり、各自の異世界の考え・感情・哲学をちょっと仲間調で打ち明けてもよいのではないか」という趣旨で隔月ほど年5回の勉強会を立ち上げた。1985年4月スタート初回出席者は12名、美濃部都政下で部長だった男が東京の21世紀の到達予想を語ってくれた。

その後多いときは25名、少ないときは10名と波があるが、交代で各自の専門分野や趣味の分野や時局談など1時間ほど話した後、意見交換をすることにしてきた。早いもので、今日まで150回以上続いているが、2005年2月私の提案で戦時中の私たちの記憶をまとめることになり、2年かけて早大商学部元教授の男の大変な努力により、会以外の同級生の多くの協力を得て510ページの卒業生文集にまとまった。

これは、そのうち私の選択編集で戦時中に焦点を当てた私達の体験記憶である。以上

2015 11 27 平石祐一

その1 学校生活

私たちが入学した昭和18年は「戦時色が濃厚で、1年生から3年生までは皆カーキ色の制服だった。上着、ズボンだけではなく、帽子も同色の戦闘帽で、上級生のうち4、5年の生徒は冬は紺、夏は霜降りの学生服を着ており(ボタンはペン剣を浮き彫りにした黒い練り物と思われ)うらやましかった。登校下校にはゲートルを着用することが規則になっており、これは割りに時間がかかるので遅刻の一因にもなった(児玉)

当時の定員は250名の枠に1250名が応募する難関であった。試験は口頭試問と内申書だけだった。クラスの席次は成績上位者から順に後列から前列に向かうというものであった(初野)。

入学早々3つのことに驚かされた。第1は先生を何々さんと呼んだこと、第2に一学期の歴史の中間試験に、ただ一問。「丸々時代について述べよ」あまりの問題の大きさに戸惑った。第3は「第1次受験校で不合格になり当校へ来だのだから在校中に彼らに追いつき追い越せ」といわれたこと(近藤陸)。

当時の開成の先生方は黒いガウンを着ており、最初の地理の時間に、痩せ型で背の高い大井先生がガウンを翻して教室に飛び込んでくるような勢いで入ってこられたのにはびっくりした(大川)。

「今満州では満蒙開拓義勇軍とか言っているが、荒野を開拓するのではなく、満州人が開拓した土地を取って、其処に義勇軍が入り、満州人は更に北の土地を与えられ開拓させられている。勿論満州人が開拓したといっても限度があり、南の土地でしか生活したことの無い日本人にとっては大変な苦勞ではあるが、満州人にとっては取られたことには変わりはない。何時の日か彼らの怒りを買うことになろう」。その時は大井先生大変なことを言うなど驚いたが、戦後満州引揚げの悲惨な話を聞く度にその卓抜な先見の明に感嘆せざるを得ない(T)

浦校長は「ペンと剣に勝る」の校章につき軍人に聞かれたら「文武両道」と答えておきなさいと言われた(福島)

国語は1年の最初から北村孝成先生は藤田東湖の『文天祥正気の歌に和す』『天地正大の気粹然として神州に』を教えてくれた(新沢)。

染谷先生は緑の木陰で人の生き方を語られた。当時の状況からするとかなり反戦的なことも語られた。「開成魂はなんだね」と問われ返事に窮していると「プライドだ」と言われた(後藤)。

また先生は英国のイートン校は校則が無く、あるのは「紳士たれ」という話が極め付けだった。「何に何すべし、何何すべからず」という時代に「紳士であれ」という一言で自分を律する素晴らしさを知った(吉沢)。

柔道の時間、田島先生が皆を座らせ何か話を始めた。この時M君が話しかけてきた。シーとしたがとき既に遅く「おい、こっちへこい」と穏やかな声でM君がよばれた。先生がM君を後向きに座らせて首を絞め落とし、活を入れた途端に目を開けてキョトンとしたのが何か可笑しかったが、この時は声を出して笑う奴はいなかった(前田)。

中学2年生になった時、音楽の時間に担当の平戸先生が音楽教室で『今日は音楽鑑賞の時間にします』とあって、ベートーベンの交響曲第6番田園をレコードで聞かせてくれました。流れてくる曲を丹念にわかり易く解説してくれました。特に第3楽章の部分は鳥の囀りカッコウの鳴き声などのどかな田園風景の音で表現するシンフォニーの素晴らしさに感激感動した。教室の窓から校庭をみると、配属将校の西野教官の号令いっか先輩達が全員足にゲートルを捲いて木銃の形をした銃剣をもって軍事教練をさせられていました。戦局が厳しくなって世の中が戦時色一色のとき、目の前の軍事訓練とはかけ離れた音楽室の名曲の表現は、なんとのどかと物凄い感動をしたことを覚えています(長田)。

昭和18年といえば太平洋戦争はすでに敗色が見え出した筈だが、まだ学校はのどかだった。英語を初め授業は普通に行われたし、学校行事も次々開催された。当時はボートレースも全校上げてやっていた。試合近くなると昼休みに連日校庭で上級生からはっぱをかけられながら、応援歌の練習をしたものだ(五十嵐)。

スポーツは独自の開成ボール、しゃもけんが

ありました。しゃもけんは左足で立ち、右足は左手で後ろから足先を持ち、左手でベルトを持って、左手の肘と右足の膝を使って、相手を倒す競技です(濱田)。

(開成)ボールをもって走ってくる敵走者を止めようと突き出したゲンコツ「あッ矢部君だ」と思った瞬間、顔面に見事にカウンターパンチ、彼は顔をくしゃくしゃにして走り去った(大久保)。

昼食は持参の弁当であったが、昼食直前に5年生が教壇に並び「箸とらば天つち御大の御恵み(山より高き君が恩、海より深き父母の恩)君と父母との御恩忘れるな」と斉唱してから箸を取った記憶がある(平石)。()部分吉岡はなかったと指摘(2015.3)

1年生の教室の黒板の右端に「本日居残るべし5年」という文字が書かれていることがしばしばあった。放課後4、5人の5年生が各クラスへ入ってきて所謂お説教をした。やたら怒鳴り散らすようなものではなく、割合まじめな話をした。中央に静かに説教する人、両脇に時に気合を入れる生徒を配し1時間位行われたと思う(児玉)。

1年5組の時、上級生が突然教室に進入「お前から生意気だ。開成健児精神をおしえてやる」と前の席から順に鉄拳を喰らわされた(坂本)。

1年生は木銃で藁人形に向かって銃剣道を練習した。軍事教練で代々木の練兵場に行った帰り、隊伍を組んでかえらねばならないところを、バラバラになったということで、翌日碎石敷の校庭に長時間座らされた(森岡)。

富士の裾野に初めて1年生全員が演習に参加した。確か2泊3日であったが、もともと陸軍演習のあった富士岡荘の演習場はあちこち砲弾の穴があり、行進の際にその跡の穴が深くかなり苦労した。夜間の宿泊所は兵舎で寝床には南京虫がいて大変苦労させられた(野口)。

富士での軍事教練は昭和19年6月25日から30日まででした。私は木銃の重さと匍匐前進に悩まされ続け、何度も落伍すれすれで、危うくクリアしましたが、28日夜10時半の非常呼集では大失敗しました。連日の激務の疲れで熟睡していた私はすぐには起きられず、ゲートルも巻

けず靴も見つけられず集合場所に遅れに遅れて到着し、教官からひどく叱られ「お前は戦死者だ」とまで言われ、仲間からもサンザンからかわれました(佐々木節)。

その2 学徒勤労働員・王子陸軍造兵廠でのこと

我々が働くように動員されたところは、陸軍第一造兵廠と呼ばれ、本部と主たる製造所は王子区下十条(現北区)にあり、その他埼玉県の川越、大宮、宮城県の仙台、富山県の小杉にあった。

王子区の製造所は第一製造所、第二製造所、第三製造所は尾久工場、江戸川工場の2工場の3つに分かれていた。第一製造所は小銃実包、12ミ機関砲、20ミ機関砲用薬莢、機関砲用保弾子などを、第二製造所は中・小型無線機、電話機の生産を、第三製造所は高射砲用・一般・航空信管部品の製造と組立てを行っていた(東京学徒勤労働員の研究一斉藤勉著)

入所 昭和19年12月12日 185名 3工場に配属

同月9日付で「戦争死亡傷害保険」契約が、「東京開成中学校報国団団長浦武助が契約者、被保険者梅津貞二郎、受取人梅津好美、保険期間19.11.5~20.11.4。保険金額一千元、保険料三元」の内容でなされている。当時職工の日当が保険料と同程度であった。

弾丸工場(工場長永井大尉) 弾丸薬莢の定員作業で独協・上野高女と共同作業(佐々木、佐藤、星野、宮城)。

地金から送られてきた金属板や丸棒から小銃や機関砲の弾丸と薬莢を作り、これを填薬工場へ送った。2階に地雷管定長自動旋盤があり、吉岡が操作していた。

検査工場(工場長松岡大尉) 薬莢、信管、弾丸の検査。マイクロメーターで厚さを測り、基準値外のものを摘出する作業。その時初めてノギス?ダイヤルゲージなどを扱った。毛髪の厚さが7080マイクロメーターであることがわかった(西村、橋口、原、亀井、斉藤)。

地金工場(工場長安東大尉) 使用済み弾丸、薬莢、くず鉄などの撰分。

填薬工場 昭和20年1月16日に、学校防空隊の佐々木、村上など57名追加加入所した。

冶金・洗浄・地金鋳物工場星野、宮城、吉岡など再配置される。

滝野川分工場 昭和20年4月13日以降再配置される。昭和刀工場で、女子大生が布紐をかけていた。朴の木を削って日本刀の鞘削り、漆塗りでかぶれて研磨機のほうへ変わった(森岡、新沢)

終戦の日、その昭和刀で竹林を切ったことが忘れられない(西村)。

坂井鉄工場 総武線沿線の生徒50名ほどが堀切菖蒲園近くの軍艦の錨製造工場に配置換えされた。昭和20年3月9日ストライキを考えていたが、翌10日の大空襲のため不発。3月21日以降造兵廠地金工場に再配置された(橋口)。

造兵廠へ行って1週間目ぐらいの朝、4~5人で入門して暫く歩いていると、「こら! 其処の学生とまれ」「動くな!」と叱咤の怒声がとんできた。皆であたりを見回したが誰もいない。上を見ると3階の窓から身体を乗り出して将校が怒鳴っている。そして、降りてきて「貴様らなんで俺を見て敬礼せんか!」「貴様ら開成だな、もともと開成はこの非常時に問題を起こしてけしからん!」と往復ビンタがとんだ。「上まで見ませんでした」といった途端「だから駄目なんだ」と更に強烈なビンタが飛んで来た(豊島)。

弾丸工場の副官にS少尉がいた。彼は威張り散らして評判がよくなかった。雪の積もった日、雪合戦にかこつけて少尉にシートをかぶせ殴ってやろうという計画を独協生が立て、開成に参加の呼びかけがあった。計画どおり実行され、少尉に制裁が加えられた。これが理由のすべてではないが、工場長が更迭された(K君)。

検査工場で誰かが工員を侮辱したというので、M大尉の前に整列させられ、誰がやったかと詰問された。何人も手を上げたので大尉はお説散をしている内に激昂し、最前列にいた塚原君は軍刀の

抜き身で平手打ちにされあざができた(平田)。

開成の生徒5人ばかりが歩いていたら、向こうから大尉がやってきた。必然的に一人が号令をかけ「歩調を取れ」「かしら右」とやらされたが、歩調が合っていないので「もとへ！やりなおせ！」と3回やりなおされた。4回目に生徒が元の場所に駆け足で戻された時、うんざりした僕らは「このまま逃げようぜ！」と横手のわき道に逃げてしまった(村上)。

ある日、休憩時間に友人と通路に出た。その時前方から貫禄ある一人の陸軍将校が近づいてきた。この将校が声をかけてきた。「君たちは開成の生徒か、私も開成の卒業生だ。技術将校の松岡だ。現在当造兵廠に配属されているが、新兵器の開発に携わっている。余談になるが良い話がある。わが軍は先端技術を使ってアメリカ本土を攻撃できる新兵器を開発中だ。近いうちに朗報が届くだろう」と言って立ち去った。実はそれが風船爆弾だったのである(堀田)。

空襲で工場の機械の一部が破壊されたときのこと、発送に遅れが出てはいけないと、工場長が火薬量検査の工程を省略して弾丸を発送しようとした。これを見た私たち生徒は「このまま出荷すれば前線の兵隊さんが死んでしまう」と抗議し、これが聞き入れられぬと見るや、ストライキを決行。製造ラインは3日間停止した。ストライキに至った理由が理由だけに、この一件は単なる怠業として処理されず、工場長は更送され、現役曹長が新任工場長に着任することによって落着した(初野)。

私は3月10日の空襲を造兵廠の防空壕の上で花火のように光りながら落ちてゆく焼夷弾を呆然とながめていた(鏡)。

4月中旬だったと思う(13日のこと)。前夜の空襲で工場が被爆して完成品を収納した倉庫は燃えくすぶっており、弾丸の破裂する音がひきりなしに聞こえた(佐々木節)。

20.4.13の大空襲で、夜勤中の工場が焼かれ、命からがら荒川河川敷まで逃げました。勿論本郷の我が家もまったく灰と化してしまった(八

景)。「手拭の旗暁に翻る」村上義人著(同級生)が造兵廠及びその光景を描いている。

ある時、家に帰り洋服を脱ぎ着替えをしようとしていると、疎開先から帰っていた母親が悲鳴を上げ「下に降りなさい」という。何のことかわからずいわれるままに玄関のたたきに降りる。すると「下着を説いで裸になりなさい」と命令。「こんなに風が一杯なのに解らなかったの」と喚く。母親はお湯を沸かしぼくの下着を熱湯に漬け風を殺していた。母親に下着を見せられると、下着の縫目にびっしり風が張り付いており、卵が気持ち悪いようにへばりついていていた。その思い出は戦後DDTを頭から吹き付けられた光景につながる(田山)。

一緒に挺身隊で動員されてきた25、6歳のお姉さんと帰りが同じになり、造兵廠近くの花屋の二階に誘われた。緋の上品なもんぺ姿のお姉さん5、6人で生花とお茶の稽古をしていた。何回通ったか定かでないが、当時贅沢は敵だの対極である豊かな贅沢でない静謐な時の世界であった。年上の女へ憧れを持つようになったのは多分この頃のことがあったからであろう(武田)。

20年1月末、久しぶりの休日に友人と4、5人連れだって浅草に行きシミキン(清水金一)一座の芝居を見たことがある(原)。

(造幣廠時代と思われるが)当時はやっていた流行歌を皆でよく歌った。『新雪の歌』むらさき煙る新雪の、『湖畔の宿』森のさびしい湖に一人来たのも、『純情二重奏』落ち葉散る散る山間の、『山の寂しい湖』森の青葉のかげにきて、など(平田)。

その3 空襲のこと

昭和20年3月10日のことであるが、言葉ではいえない凄まじい状況だった。悲惨という他なし。北千住・尾久・江北橋(開成の開拓農場があった荒川の河川敷。隣に十文字高女の農場あり)を通り造兵廠に着いたが、死屍累々、それも真黒そのもの、性別不明のもの、防火用水槽の中で死んでいる者、その臭いが最悪。焼死して時間が余り経っていないので、葱を焼いたような臭いが一

杯だった。後年検事になってから殺人事件(殺されて焼かれた死体、焼かれないで放置された死体など)種々約50体の検証に立ち会っているが、前述の経験は私の嗅覚と検証・解剖立会いに非常に役立ったことを申し添える。

何しろ参ったことを再度申上げる。都電の架線は焼かれ垂れ下がり、死体の状況は前述の通り、死んだばかりなので所謂死臭はなかったものの、菊池君「臭いね、葱の臭いというけど本当だな」。小生「俺もう厭だよ、松戸へ帰ろうよ。気持ち悪くなっちゃった」。菊池「頑張れ、せっかく此処まで来たんだから、造兵廠まで行こう」と言ったのを今も覚えている会話の中身です。その間見たものは死体の他ビルのガラスが溶けて流れ塊になっていたこと。道路を歩いている人がいたが、顔が火傷で水ぶくれの人、中には顔面が半焦げになり辛うじて歩いている人、その人たちの殆どが着衣が半分以上焼け焦げてなくなり半裸体になっていたことを覚えている。その日の夜になり、菊池君と再び自転車で松戸に帰った。帰途は同じ道を通ったが臭いは全く変わっていた。所謂死臭である。菊池君と2人、夢中でペダルを踏んで帰った。何しろ葛飾橋(旧)を渡ったらおふくろさんの胸に飛び込んだ気持ちだったし、空気が本当に甘くうまかったのを覚えている(原島)。

同級生から借りた本を返す約束の日曜日(昭和20年3月4日)、勤労働員先の造兵廠へは持ち込めないで、自宅まで行くことになった。当日は雪。寒い。「今日は止めた。来週にしよう」の私の言葉に「約束は守れ」と私を家から追い出した父。山手線の車中で空襲警報。下車して駅下に避難。ドーン、ドーンと爆弾の落下音が近づき、遠のいてゆく。今回も助かった。電車は不通、彼の家を尋ねるのは無理なので家に帰ることにした。雪で重い足を踏みしめて家へ帰った。家は崩壊。庭には14～5メートルの穴。『お父さんが爆弾でやられた。すぐ西福寺へ』と近所の人声。寺の本堂の前に遺体がゴロゴロ。父の遺体の傍らで私の体を抱きしめた母。いつもは空襲でも防空壕に入ったことが無い父が壕内で窒息死。簡単な木製の棺箱に納められた遺体は2～30体一括してトラックでどこかの焼き場へ運ばれていった。次の日に墓に埋骨に行き、骨だけ取り出そうとしたら中はドロドロの半焼け液体ばかり。

り。骨らしいものは無かった。「約束を守れ」の父の一言が私を救ってくれた。以後、私はこの言葉を遺言と思って頑なに守り続けた(吉田)。

3月10日ながーい1日／その夜定例の空襲警報が出て/外へ出るとサーチライトが劇場のように交差していた／何分経ったか 突然家の中で大音響／台所に焼夷弾の梱包鉄板が突き刺さっていた・・・／それだけで済んで警報解除／東京の東のはずれの自宅から／荒川の堤へ行くと西の川向こう 都の上空が真昼のよう／一帯の建物が一面燃えていた夜明けだ／中学生のぼくはともかく徒歩で学校へと／荒川を渡る橋へとくると／顔中煤だらけ 目は真っ赤な人々の群れ／ふらふらこちらへ渡ってくる／正視できずにゆきちがう 平井地区は焼け野原 道路は瓦礫でふさがっている／総武線路へ昇るのが早道 枕木が落ち下がガランドー こわごわ下みながら一歩一歩進んだが／近くにべろーっと胴の赤く皮むけた馬が横たわり／ごろごろ転がっている黒焦げの死体の中／見遥かすと右から左上野方面から東京方面／跡形もなく／レールの上の綱渡りが続く／踏み出す足元から枕木ががさつと落ちる／川をいくつかわたったが／男はうつむけ女は仰向けの水死体が一杯／死臭が押し寄せる両国駅だ／この先隅田川鉄橋はとても怖くて渡れぬ／下へ降りると駅前ホテルはまだ残っている／壁に黒焦げの人がよりかかっている／乳房が脇の下に白く見え／それにしがみつくように半焼の赤ん坊だ／手を合わせる／ナムアミダブツナムアミダブツ さらに浅草橋秋葉原をすぎる／日暮里の学校も音楽室など焼失していた／先生は「危険だよすぐ帰りなさい」／そこで地獄の街を日暮れまで歩いて戻ることにした(桜井君の回想文を詩に)。

東京の度重なる空襲では同級生の水原、永見両君が殺されている。そのほか同級生の両親や兄弟姉妹が幾家族かが爆死や焼死していることを付言しておく。

その4 他の特記事項のこと

戦争末期には、東京空襲が激しくなってくるにつれ、同級生の多くは疎開をしており、その中に

は広島に行って8月6日の原子爆弾に被爆した森沢君も含まれている。以下、同じく被爆し生きながらえた彼の兄の手記である。

弟は崇徳中学3年生として土橋で建物疎開作業に従事していた。爆心地から300メートル位で、原爆投下の殆ど真下であったが、建物の陰になって直撃を免れたらしい。生き埋めになり、先生、仲間に助けだされ、頭や体に切り傷を負い血だらけになりながら、帰宅途中医院に飛び込み、数針縫って4～5里の道を、恐らく死体や負傷者を押し分けて家に夕方遅くたどり着いたらしい。爆心直下で生き残ったのは奇跡だったが、結局は放射能を大量に浴びており、口や鼻から血を噴出しながら、当時は何がなんだかわからぬうちに、8月31日早朝死んでしまった。

血を止める為に鼻に綿を詰めても血が固まらず、袋のようになって出てくる。口からも定期的に痰状の親指大の血の塊を吐き、だんだん衰弱していった。

夏のことで蚊に刺され円錐状に肉が抉られ、中の白身、筋、骨まで見えるようになり、直径2～3センチの傷が数箇所出来た。切り傷は2週間もすると殆ど治りかけたが、原爆症はひどくなるばかり、病院もなすすべもなく、先生は栄養をとりなさいの一点張り。ぶどう、トマト、無花果などを近所の人々の好意で食べさせたが体力的に吸収できず食欲も殆どなく、2週間目頃からは体中が雇いらしく『痛い、痛い』を一日中弱弱しく叫んでいたが、3週間目頃からは『殺してくれ、殺してくれ』を繰り返していた。最後の2～3日はおとなしくなり殆ど口を利かなくなった。8月31日明け方ずと弟のそばで添い寝していた母に看取られて亡くなった。

同級生から海軍予科兵学校に2名淡路・中村昂一、陸軍幼年学校に3名星野忠義・杉浦・? (凛々しい姿だったという同級生もあった)、土浦予科練に2名中島・中村健が志願して行っている。

その5 疎開

20年3月以来急速に疎開するものが増加した。合計で119名(名簿上は115名)であった。

例を挙げると、栃木県佐野市吉沢、石川県立羽杭前田、栃木県上都賀郡西方村原、その近所矢部など。疎開先の西方村というのは見渡す限り水

田で、まさに穀倉地帯だったが、我々は配給米を受け取るだけで米が自由に食べられることはなかった。それどころかある時、小麦が配給された。そのまま、ジャガイモと一緒に釜で炊いたものは硬いけどよく噛めば味が良いことがわかった。大麦より遥かに美味しいと思った。疎開先の主人が小川で鮎其の他小魚を捕らえ一部を時々分けてくれたので、味噌汁に入れて食った。田圃で捕らえた蝗や蛙も口に入るものは何でも食べた(原)

私が転校したのは県立栃木中学校、毎日松根油つくりのために『松の木の根』を掘り出す作業の連続(大木)

その6 補佐隊

いざ空襲に備えて、30分以内に学校へ駆けつけられる者ということで60名、第1班は5分以内、第2班が10分以内と5分毎に第6班まで各班10名づつというような構成だった(佐々木)。

歩いて学校へ行けるといっているので、私は空襲から学校を守るため補佐隊として学校に残ることになった。約1ヶ月昼夜2交替で校舎に寝泊りした真っ暗な人気ない教室に数人づつ机を並べてベッドとし、毛布にくるまって夜を明かした(?) 小生たちは皇室の写真、国旗、校旗等ある地下室で寝泊り(坂本)

補佐隊は宿直もあり、夜食を学校で食べ、当直の兵隊さんに猥談を聞かされたり、また解剖や蝦幕のばしとって皆に抑えられ、下半身を脱がされたこともありました(浜田)。

鉄兜をつけて寝るのも、空襲よりその夜襲に備えて、弱い者は敵の暴れん坊達にGAMANO BASHIにあったり、解剖されて棹の先に日の丸を付けられてしまうのである(佐々木正)